

東区のパンorama



「東区ぼくもわたしも交通安全」作品コンクール

「東区ぼくもわたしも交通安全」作品コンクールの表彰式が、11月11日、東区民センターで行われました。

区内の小中学生から三つの部門に多くの作品の応募があり、最優秀賞1人、優秀賞4人が各部門から選ばれました。各部門の最優秀賞受賞者は次の3人です。

標語の部	藤田	里奈さん	(北小1年)
作文の部	浅岡	夏林さん	(札苗小6年)
ポスターの部	松崎	菜美さん	(北園小6年)

10カ月児健診時に絵本の読み聞かせをしています

東保健センターでは、第1～第4金曜日の午前中に、生後10カ月の乳幼児を対象とした健康診査をしています。ロビーで順番を待っている親子に、ボランティアが、絵本の読み聞かせをしていますので、健診のときには、体験してみたいかかでしょうか。



ひがすどーらー

第33回

牧草の生産(一)

牧草生産の始まり

かつて雁来や丘珠には、草原が広がり所々に干し草の山を見るのができました。北海道と牧草のつながりは古く、明治初期にまでさかのぼります。札幌農学校に就任したクラーク博士なども、早くから牧草育成を提唱し、その普及に努めました。「牧草なくば家畜なし」を合言葉に、北海道各地に草原が広がっていったのです。主に家畜や軍馬用の飼料として、札幌村で牧草作りが本格化するのには、一八九七(明治二十年)ころでした。

牧草地経営と興農園の創設

牧草こそ農業の根本という信念を持ち、牧草生産に力を注いだ小川二郎という人物がいました。小川は、「牧草論」を著し、牧草研究の先駆けとなりました。また、種苗や農機具の輸入、販売などを目的とした興農園や、札幌初のデパートとなる五番館を創設した実業家でもありました。

一八九四(明治二十七年)ころから、札幌近郊で牧草地の経営を始めますが、東区内でも経営をして



興農園(明治30年ころ)
(写真:札幌市教育委員会文化資料室所蔵)

興農園では、種苗などの販売だけでなく、新しい農機具の普及や、農村を回って栽培方法を指導することなどにも力を注いだそうです。また、大通公園に花壇を作ることを発案したのも小川でした。

いました。東苗穂北部にあった佐藤農場を、一九〇七(明治四十)年から十三年間借り受け、第八興農園として牧草生産をしています。現在の農本会館の辺りに牧草を収納する倉庫と、圧縮する機械を備え付けていました。また時期などははっきりしませんが、中沼にあった中野開墾を借り受けたほか、北十八条東一丁目辺りでも牧草地を経営していたようです。

牧草は、軍馬の飼料として重要となり、一九〇四、五(明治三十七、八)年の日露戦争の時には、軍に大量に納めるなど経営は順調でした。しかし、逆に戦争後には不況により、事業がうまくいかなくなり、次第に牧草経営にも影響してきたようです。